The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ケア実践にみる「支配」と「解放」の両義性
Author(s)	佐藤, 光友
Citation	Communication-Design. 2013, 9, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25974
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ケア実践にみる「支配」と「解放」の両義性

佐藤光友（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター : CSCD）

The ambivalence of “dominance” and “release” in practicing care

Mitsutomo Sato（Center for the Study of Communication-Design:CSCD,Osaka University）

ヘレン・ケラー（Helen Keller 1880-1968）の学ぶことへの意欲を引き出し、彼女の閉ざされた心を解放したアン・サリバン（Anne Mansfield Sullivan 1866-1936）の言動は、教育者・援助者の理想の姿として高く評価されている。だが、アン・サリバンの教育的援助は、ヘレン・ケラーを服従させる、支配的でパターナリスティックなケアのあり方としても取り挙げられている。この論文では、アン・サリバンのヘレン・ケラーに対する、一方で「支配」的な、また他方で「解放」的なケアのあり方に着目する。そして、その両義的なケアのあり方がどのような場面や状況からもたらされるのかを解釈し考察する。論者は、援助者自身の被援助者に対する両義的なケアのあり方についての論考を深めることで、よりよいケア実践につながる理論を提示してみたい。

Anne Mansfield Sullivan is highly evaluated as an ideal educator and supporter for her success in motivating Helen Keller to learn and releasing her closed mind. On the other hand, the educational support of Sullivan is also regarded as a dominant and paternalistic care, which compels Helen Keller to obey her. This paper focuses on the dominant but releasing care Ann Sullivan gave to Helen Keller. Furthermore, it discusses in what situation and context the ambivalent care is represented. The author attempts to suggest a theory which will lead to practicing better care by studying how ambivalent care given by supporters should be.

キーワード
ケア実践、ヘレン・ケラー、アン・サリバン、ハイデガー
practicing care, Helen Keller, Anne Sullivan, Heidegger

1. はじめに

すべての事物には名称があるということに気づかせ、ヘレン・ケラー（Helen Keller 1880-1968）の学ぶことへの意欲を引き出し、彼女の閉ざされた心を解放した教師であり、援助者であったアン・サリバン（Anne Mansfield Sullivan 1866-1936）の言動は、教育者・援助者の理想の姿として評価されている[1)]。だが、アン・サリバンの教育的援助は、一方で、ヘレン・ケラーを服従させる、支配的なケアのあり方として取り挙げられている[2)]。

本論文では、後述するように、諏訪［2009］のいうようなアン・サリバンの教育・援助の

あり方を、単純に、近代的自我を構築するための暴力的行為として捉えるのではなく、支配と解放の両面から捉え直すことを試みる。そのことによって、アン・サリバンのヘレン・ケラーへの関わりを、一人の人間として葛藤したアン・サリバンの行為、いわば、教育者・援助者という「実存」が、学ぶ者・被援助者のという「実存」に関わった、その相互関係の実存的行為として解釈し直してみたい。

そこでここでは、アン・サリバンのヘレン・ケラーに対する、ときとして、「垂範的・解放的な援助」すなわち「垂範することで他者を自由にする気遣い」、ときとして「代行的・支配的な援助」すなわち「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」が、どのような場面や状況から現象しうるのかを解釈する[3)]。さらに、アン・サリバンからの教授とは異なる、ヘレン・ケラー自身の物への配慮すなわち、セルフケアに着目することで、ヘレン・ケラー自らの気がかり（ケア）を分析し、解釈する。これらの解釈を通して、援助することに内在している両義的な側面、すなわち、ケアのあり方にみられる「支配」と「解放」の両面を明らかにする。論者は、ヘレン・ケラーに対するアン・サリバンのケアのあり方に着目し、そのケアのあり方を捉え直すことで、「援助者の被援助者」へのより本来的な相互関係を育むケアのあり方を探究する。これらの解釈にあたっては、マルティン・ハイデガーのケア論を機軸として、エドムント・フッサールの生活世界、さらに、メアリー・リッチモンドのソーシャルワーク論などを手がかりとする。

2. 科学的な知のあり方と生活世界―ケアすることに先立って―

ヘレン・ケラーは、知られているように、生後19ヶ月で視覚・聴覚を失うというハンディキャップを背負った子どもであった。そのために、彼女には特別な援助が必要であったことはいうまでもない。ヘレン・ケラーの家庭教師であったアン・サリバン自身も、パーキンス盲学校に14歳で入学し、手術により視力がかなり回復する15，6歳までは、眼が不自由であった[4)]。このパーキンス盲学校に住んでいたローラ・ブリッジマン（Laura Bridgman 1829-1889）と一時期同じ部屋で暮らした経験が、のちのヘレン・ケラーへの指文字教育として活かされていくこととなる。アン・サリバンが入学したとき、ローラ・ブリッジマンは50歳であったが、彼女は嗅覚も味覚も失われていて、残されていたコミュニケーションツールは、触覚のみであった［飯塚、佐藤 2009:14］。そのために、ローラ・ブリッジマンとは指文字を通して会話することが不可欠であった。このローラ・ブリッジマンとの指文字でのやり取りの経験が、アン・サリバンのヘレン・ケラーに対する指文字教育への確信となっていたことは容易に推測できる[5)]。

そこで論者は、メアリー・リッチモンドのローラ・ブリッジマンについての言及に着目

し、アン・サリバンの教育観に影響を与えたローラ・ブリッジマンの「物と物との区別ができる指文字」について考察する[6)]。1837年にボストンの博愛主義者、サミエル・グリッドレィ・ハウ博士（Samuel Gridley Howe 1801-1876）に見出されたローラ・ブリッジマンもまた、視覚と聴覚を奪われた子どもであった[7)]。そのサミエル・グリッドレィ・ハウ博士は、アン・サリバンが入学することになるパーキンス盲学校を設立した人物でもある。ハウ博士がローラ・ブリッジマンを組織的に教育することをブリッジマン家に申し出たとき、ブリッジマン家と交流のあった一人の隣人であるアーサー・テニィ（Asa Tenney）という老人が、そのことに真っ向から反対をした。なぜならば、老人は、その子の教育については自分より右に出るものはいないと考えたからである［Richmond 2010:2=2007:17］。

アーサー・テニィがローラ・ブリッジマンのことをよく理解していたというのは、ハンディキャプをもった子どもに対する科学的・組織的な教育ならびに援助の方法を知っていたからではない。むしろ、老人は、人間の存在を合理的に捉える教育・援助方法に反対しただけでなく、その必要すら感じていなかった。なぜならば、科学以前に、毎日、郊外を散歩するという老人と少女との間で営まれてきた「生活世界（Lebenswelt）」（自然科学の忘れられた意味基底としての生活世界）は、その世界において、自然なかたちで、物の存在を知るといった、そういう知のあり方が成り立っていたからである。そのためにすでに、老人によって、ローラ・ブリッジマンは、その老人と他の人々を区別し、猫と犬、りんごと石とを、それぞれ区別することができたのである［Richmond 2010:2=2007:17］。

少なくとも、リッチモンドの見識から読み解くならば、アーサー・テニィは、少女との間で育まれた生活世界、例えば、自然環境のなかを散歩するという日常生活の世界のうちに築かれた、言わば、我と汝の世界が、科学的・組織的な教育の知が入り込むことによって、壊されることを恐れたのである。すなわち、フッサールの言葉を借りるならば、生活世界は、直接的な経験の世界であり、科学的認識の明証性の基底として、先科学的な認識基盤だからである[8)]。

論者は、あくまでもリッチモンドの記述から、援助者の被援助者に対する解釈を試みている。この試みから読み取れることは、老人と少女との専門性をおびていない関係性には、援助する者とされる者にみられる主従関係は存在しないということである。そこには、専門職としての教師やケースワーカーの姿もない。リッチモンド自身、隣人アーサー・テニィと専門家とを対比して、素人であるこの老人に、より根源的なケアのあり方をみていたのである。ただし、このことで留意しておかなければならないことは、リッチモンドも指摘しているように、「ハウ博士のもっているような人間の心の働きに関する知識と社会資源に関する知識」が必要でないというのではない［Richmond 2010:2=2007:17］。むしろ、生活世界のうちで営まれる教育のあり方を基盤にして、科学的・組織的な知の教育が営まれなければならないということである。あくまでも、リッチモンドは、被援助者に対する態度が、生活世界

で営まれている援助・教育への姿勢としてまずあって、その上で、被援助者に対する科学的な認識が成立していることを力説しているのである［Richmond 2010:2=2007:17］。

3. 指文字によるケアと身振りにみるケアの相違点

アーサー・テニィが、散歩する途上で小川に立ち寄り、ローラ・ブリッジマンに物の区別を教えていたその情景は、アン・サリバンがヘレン・ケラーを連れ出し、井戸小屋まで散歩したものと重なり合う。だが、アーサー・テニィの教え方は、アン・サリバンの教育の仕方とは同じとは言えない。では、何がどう違うのか。アーサー・テニィが、ローラ・ブリッジマンを連れて行った小川のほとりの情景から見てみよう。

> 老人は、「水面に石を投げ込んで、彼女のほほに水しぶきを感じさせることによって、水と陸地との区別を教えた」［Richmond 2010:2=2007:17］

このことは、確かに、アン・サリバンが勢いよく流れている井戸水に、ヘレン・ケラーの片手をかざした光景に似ている。しかし、投げ込んだ石の「水しぶき」が自然にローラ・ブリッジマンのほほに当たるというアーサー・テニィの教え方は、アン・サリバンのそれとは違う。アン・サリバンの1887年4月5日、井戸小屋の場面ではどうであったか。

> 井戸小屋に行って、私が水をくみ上げている間、ヘレンには水の出口の下にコップを持たせておきました。冷たい水がほとばしって、コップを満たしたとき、ヘレンの自由な方の手に「W-A-T-E-R」と綴りました。その単語が、たまたま彼女の手に勢いよくかかる冷たい水の感覚にとてもぴったりしたことが、彼女をびっくりさせたようでした。彼女はコップを落とし、くぎづけされた人のように立ちすくみました。［Sullivan 2003:150=1973:34-35］

この情景からは、「私が～している間にコップを持たせておく」といった、サリバン先生のヘレン・ケラーに強いる働きを読み取ることができる。確かに、このアン・サリバンの行為は、「W-A-T-E-R」という綴りを教え込ませたいがためのヘレン・ケラーに対する強制を伴なっていないとは言えない。綴りを教え込ませようとするアン・サリバンの行為、そのケアのあり方には、自分で状況を判断し行為することができる援助者アン・サリバンが、被援助者であるヘレン・ケラーに対して、意識するしないにかかわらず援助者と同じようになることを志向し、望む傾向が含まれていると言える[9)]。すなわち、ケアをしている援助者の

動作・行為を無意識的に被援助者に投影してしまうことがあるということである。

しかしながら、ラッシュも述べているように、指文字を綴るという行為が、物と事柄の一致に気づかせるための有効な手段であるということを、ローラ・ブリッジマンとのやり取りから学び知っていたアン・サリバンが、この学びをヘレン・ケラーにも試みようとしていたことは評価されるべきであろう［Lash 1980:21］。アン・サリバンが、ヘレン・ケラーのことを思い、彼女の手をとり綴ったこと、そのことは、ヘレン・ケラーにとって、とても重要な指文字の経験であるということには変わりはない。

だが、井戸水の場面は、アーサー・テニィのような、石を小川に投げて、その「水しぶき」を少女に感じさせるといった、言わば、言語化される以前の物との出会い、自然との戯れ、自然とのふれあいのなかで体感させる仕方での緩やかなケアのあり方ではなかった。というのも、アン・サリバンが「M-U-G（コップ）」と「W-A-T-E-R（水）」との区別に主眼をおき、指文字を習得する者にならんがための延長として、ヘレン・ケラーを井戸へと引っ張っていったことは、各々の自伝、手紙からも読み取ることができるからである［Sullivan 2003:145-150=1973:25-35］［Keller 1902:14-16=1995:30-35］。

もちろん、アン・サリバンも、自然のなかで教育することの重要性には気づいていたし、ヘレン・ケラーへの教育のために欠くことのできないものであるということは知っていた。しかし、その自然との関わりも、第一義的には、指文字を介したものでなければならなかった。「その単語が、たまたま彼女の手に勢いよくかかる冷たい水の感覚にとてもぴったりしたことが、彼女をびっくりさせたようでした。」この表現からもわかるように、勢いのよい「水しぶき」の感覚は、アン・サリバンが意図していなかった出来事だったのである。

さらに、井戸小屋の場面において、水の冷たさという自然の贈り物を、仮に、ヘレン・ケラーがシグナルとして感じとれなかったならば、その場ですぐに、物と事柄との一致（物と言葉との繋がり）に彼女が気づかされたかどうかはわからない。むしろ、水の冷たさという自然の偶発的な贈り物をシグナルとして受容できる身振りをヘレン・ケラーが前もって身につけていたこと、そのことに加えて、アン・サリバンの指文字を綴る手の温もりが奇跡を起こしたとも考えられる[10)]。アン・サリバン自身も「ことばを使うことができるようになると、今まで使っていた合図や身振りをやめてしまいました」［Sullivan 2003:150-151=1973:36］と述べていることから、すでに、身振りサインをヘレン・ケラーが持っていたことを知っていた。「子どもは口をきき始めるずっと以前から、自分に話しかけられたことの内容を理解します」［Sullivan 2003:151=1973：37］と記述しているように、子どもが言語を持つまでの、言わば、子どもの前述定的世界観、言語化される以前の物への理解ということを了解していなかったわけではない。

しかしながら、「彼女（ヘレン・ケラー）に正しい文で話しかけ、必要なときには、身振りや彼女特有の合図で意味を補うことにします」［Sullivan 2003:151=1973:37］というよう

に、あくまでも身振りやヘレン・ケラー特有の合図は、補足的なものであり、指文字による言葉の習得を目指していたということがわかる。いうまでもなく、指文字による言葉の習得を第一に考え、ヘレン・ケラーの言語獲得を目指すことは、必要不可欠なことであり大切なことである。だが、それまで獲得していた言語以前の物への関わり方、その捉え方である身振り、合図を第二次的なものとして退かすことは、被援助者にとって、もっとも望ましいことであるのかどうかは議論の余地を残すところである。

当時のパーキンズ盲学校校長マイケル・アナグノス[11]からの派遣ということもあり、家庭教師を引き受けたアン・サリバンにとっては、ハウ博士のローラ・ブリッジマンに関する報告書の綿密な読解等から指文字による物事の習得を第一に果たされなければならなかったことも事実である［Lash　1980:49］。彼女にとって、ヘレン・ケラーの身振りによる示唆―感性的なもの―を打ち消して、事物と指文字の一致を実現させることは、援助者の専門家としては、必須条件だったのである。

ここで大切なことは、「W-A-T-E-R」との完全な一致をみせていた文字としての「水」ではなく、冷たい井戸水の感覚にぴったりした「水しぶき」によって、その一致を感じ取ったヘレン・ケラーの姿から、アン・サリバン自身がヘレン・ケラーとの関わりを省みて、あらたなケアのあり方を模索しているということである。援助する者にとって大切なことは、リッチモンドが説いたように、日常の環境世界から発する素朴な知の世界（フッサールの言う可能的経験が無限に開かれている生活世界）がまずあって、その上で、ハウ博士が持ちうるような科学的な知が援助される者にとって有意味な知となるということである［Richmond 2010:2=2007:16］。

リッチモンドは、「愛情と親切とは人生の閉ざされた多くの扉を開き、また多くの複雑な問題を解決する」［Richmond 2010:2=2007:17］と語り、教育実践、ソーシャルワークにおいて、親切は欠くことのできないものとしている。この場合、親切を、好意をもって人のために尽くすことと解釈するならば、親切は、ケアの一様態とみなすことができる。というのも、他者への「ケア」という言葉には、他者に対して世話をするとか、気配りをする、あるいは、献身といった意味があるからである［Reich 1995:319］。そもそも、気遣うということには、必ず、その対象が伴っていなければ、慮ることにはならない。

4. ヘレン・ケラー、自らに対するケアのあり方から

まず、ヘレン・ケラーとアン・サリバンの人形に対する配慮についての考察を試みる。なぜならば、ヘレン・ケラーの物との関わり、その自己へのケアのあり方―ヘレン・ケラー自身がわずらわしさを感じ、そのことを対処しようとするあり方―から、彼女が何をケアし

てほしかったのかということが見えてくるからである。水車小屋の場面以前、すなわち、物と言葉との繋がりに気づいていない段階において、ヘレン・ケラーは、相対的に人形を捉えていたわけではなく、新しい人形と古い人形が同じD-O-L-Lで綴れるということを知らなかった［Keller 1902:15-16=1995:32-33］。壊した新しい人形の方を「愛してはいなかった」と、水車小屋の場面以前のことを振り返っていたことからもわかるように、人形は、ヘレン・ケラーにとって、わずらわしい物であった。このような配慮の様態は、次のヘレン・ケラーの文章にあらわれている。

> 私の方は何度も練習させられるのにいらいらしており、新しい人形をつかむや床に投げつけました。壊れた人形の破片を足元に感じたときは痛快な気がしました。その人形を愛してはいなかったのです。私の住む静かな暗い世界には労わりの感情は強くありません。先生が破片を炉の脇に掃き寄せているのを知り、不愉快の種がなくなったという満足感を味わったのです。［Keller 1902:15-16=1995:33］

このヘレン・ケラー自らが、わずらわしい人形をつかんで破壊し、その人形の存在を足元で感じる態度というのは、ハイデガーのいう「何かが失われるに任せる」といった配慮の様態として捉え直すことができるのではないだろうか。この捉え直しによって、物に対するアン・サリバンの、そして、ヘレン・ケラーの配慮の仕方の相違が明らかとなる。「何かが失われるに任せる」といった配慮の様態は、物をいたわり、あるいは、それを保持しようとする活動的な態度ではない。

ハイデガーは、現存在である人間の事物への気遣いを「配慮（Besorgen）」と呼び、他者への気遣いと区別する[12)]。このような現存在の実存論的分析の主眼は、存在の意味を問うことにあったが、論者は、あえて、ハイデガーのケア論を人間学的な観点（先行的なものとして、メダルト・ボス、ビンスワンガー、プレスナー、ボルノーなどといった基礎的存在論の人間学的考察をみることができる）から読み解いてみたい。

ハイデガーは、配慮というケアのあり方に則って、世界の内にあり、そのあり方の構造概念としての諸様態を挙げている［Heidegger 1976:225］。私たちは、何か事物を調達し、何かを製作し、何かをいつでも使えるようにすることで、諸々の態度のとり方に制限が与えられるのではない。というのも、活動的態度と特徴づけられるであろう、事物を使用し、製作するといった様態だけが配慮の諸様態ではないからである。むしろ、何かをそっとしておくとか、利用しないままにしておくとか、何かを脇へ片付けることあるいは、廃棄することとか、「何かが失われるに任せる（in Verlust geraten lassen von etwas）」とかと特徴づけられうるあらゆる現象、これらの態度もまた配慮の諸様態である［Heidegger 1976:225］。

しかしながら、「何かが失われるに任せる」という物への態度は、単に人間のもつ否定的

な態度として捉えられるものではなく、反対に、ヘレン・ケラーにとっては、人形への関わりを深める様態として現象しうる。なぜならば、人形は、失われていないときには、その人形の存在は目立ってこない。むしろ、その人形が失われたとき、その人形を否定するにせよ、その人形の存在が気がかりの種となるのである。

現存在としての人間は、日常生活において、常に何かの用を足すという営みをしている。配慮的交わり、相互に指示しあっている物は、ただのものではなく、「道具（Zeug）」として存在する。ボルノーは、適所全体性が現存在へと帰着するというハイデガーの考え方を解して、「人間の世界理解の中にこそ、個々の事物のすべての理解は基づいている」としている［Bollnow 1970:47］[13]。すなわち、道具は「～のためのあるもの（etwas, um zu ～）」という指示連関の全体性のなかへと秩序づけられている。物は、目的のための手段として道具的なあり方をしている［Heidegger 2000:78f］。ハイデガーは、道具を道具たらしめているもの、すなわち、道具の「道具性（Zeughaftigheit）」を問う［Heidegger 2000:68f］。ハイデガーは、道具の代表例として、ハンマーで釘を打つことを挙げているが、それは、力を込めて使われれば使われるほど、ハンマーに対する関係はそれだけ一層根源的となり、この関係は、それがそれであるところのものとして、つまりは、道具として、ますますあらわなものとなる［Heidegger 2000:69f］[14]。

だが、物と言葉との繋がりに気づいていない段階のヘレン・ケラーにとっては、その人形を気に入らないものとして退けたとしても、人形は、彼女に触れられる道具としての指示連関を示していない。ヘレン・ケラーの人形への「配慮的交わり」は、言葉の世界が開かれた段階からはじまり、「この存在者の存在様式は手許にあること（Zuhandenheit）」［Heidegger 2000:74ff］を意識することで、確実に彼女に開けたと言える。その道具的な物のあり方が、用途をなさない、壊れた物になり、元の状態が損なわれたとき、ただの物体としての「手前のもの（Vorhandenes）」へと変貌する[15]。このように、「道具連関」は、存在論的な人間と物との関わり、すなわちヘレン・ケラーという現存在にとっての「手前」あるいは「手許」といった手で触れる物との関わりのなかで意味を持ちうるのである。

ある意味で、物と言葉との繋がりに気づいていない段階では、ヘレン・ケラーにとって、身の回りの物は、さしあたって、道具ではなく、「モノ（ただの物体）」として存在していたことになる。もちろん、言葉の世界が閉ざされていた段階においても、彼女の物と物との区別といったことは、触覚で判断していたのであるが、その物と物との連関性が、開けた世界への通路になるという認識はなかったのである。

そもそも、「モノ（ただの物体）」というのは、前期ハイデガーの見方では、その物がその物として、あらわになる、目立ってくるということである。ヘレン・ケラーが、「入口を入ると壊れた人形のことを思い出し、手さぐりで暖炉の方に近寄って破片を拾い集めました。もとに戻そうとしましたがうまくいきません。私がどんなことをしてしまったのかがわかっ

たからです。そしてはじめて後悔と悲しみを感じました」［Keller 1902:16=1995:34］という状況は、彼女に言葉の世界が開かれてから感じられたことである。ただし、言葉の世界が開かれてからのヘレン・ケラーの人形に対する関係は、現実への単なる理論的な態度というものではない。その関係は、彼女にとっての生きられた世界における人形とのふれあいであり、人形を通じて自己反省すること―はじめて後悔と悲しみを感じたこと―なのである。

物と言葉との繋がりに気づいていない段階では、元の状態ではない人形は、その物としての押し付けがましさを露呈し、ヘレン・ケラーに迫ってくる。そのことで、ますます、ヘレン・ケラーは、壊れて失われたままの人形を脇へとわけもわからず押しやることになる。物と言葉とが連関していることに気づくことによって、はじめてヘレン・ケラーは、もうすでに、壊れた人形は、自らの手許に引き寄せても、自らの許にはなく、道具との対比による、自らの手前に存在している「ただの物体」として認識されたのである。物と言葉との繋がりに気づいていなかった段階では、人形との関わりから脱しようとしたヘレン・ケラーの一連の行動は、道具連関のなかでの人形という位置づけではなく、アン・サリバンとの関わりだけが投影された人形の押し付けがましさとして感じられ、彼女はそのことから逃れようとしたのではないだろうか。

5. アン・サリバンのヘレン・ケラーへのケア、その支配と解放

では、アン・サリバンはこのような状況においてどう振舞ったのであろうか。

アン・サリバンは、ヘレン・ケラーが投げつけた人形によって、ヘレン・ケラーが怪我をしないように、また、彼女が自由に動けるようにしようとする気遣いが働いている。すくなくとも、この時点では、綴らせることをヘレン・ケラーに強制する姿勢はみられず、むしろ、本来あるべき、気遣いのあり方がアン・サリバンには垣間見られる。アン・サリバンの壊れた人形を脇へと掃き寄せる配慮のあり方は、同時に、ヘレン・ケラーに対する慮りであったことは理解できる。

だが、言葉の世界が開かれてから以後も、人形を投げて壊すという行為は、ヘレン・ケラーの癖としてしばらく続くことになる。アン・サリバンが語っているように、ヘレン・ケラー自身が、「壊す」という行為を悪い行為であるとは完全には認識していないとしている［Sullivan 2003:157=1973:48］。このヘレン・ケラーの物を破壊するという癖に対して、アン・サリバンは、そうしないように、一種の道徳を身につけさせるための強制をともなっているが、その強制は、単なる強制ではなく、ヘレン・ケラー自身が物への配慮から人への顧慮を認識していくためのケアなのである。そのことを次に考えてみたい。

ある日、友人がメンフィスから新しい人形を持って来てくれました。そこで私は、その人形を壊してはいけないということをヘレンに理解させられるかどうか試してみようと考えました。人形の頭をテーブルにたたきつける動作をヘレンにさせて、彼女に、「だめ、だめ、ヘレンはいけない子だ、先生は悲しい」と綴り、悲しそうな表情をした私の顔にさわらせたのです。それから、彼女に人形をなでさせ、ぶつけた頭にキスしてやさしく腕の中に抱かせてから、「ヘレンは良い子、先生はうれしい」と綴って、私の笑顔をさわらせました。ヘレンはこれらの動作をまねて何回かくりかえした後、とまどった表情を浮かべてしばらくじっとしていましたが、急に表情が明るくなって、今度は、「良い子のヘレン（Good Helen）」と綴って、顔いっぱいに大きなつくり笑いをしばらくじっとしていました。それから、彼女は人形を二階に持って行って、洋服ダンスの一番上の棚にのせ、その後は全然さわろうとしませんでした。［Sullivan 2003:157=1973:48-49］

ここにみられる人形を壊すというヘレン・ケラーの行為に対するアン・サリバンの教育的対処、そのケアの仕方には、共に気遣うというあり方が内属している。すなわち、アン・サリバンが指文字による伝達だけでなく、指から感じ取られる顔の表情の変化、そしてその意味をヘレン・ケラーの身体へと内属させるケアのあり方は、「人形をさわろうとしない」という、ヘレン・ケラーの物への配慮のあり方によい影響を与えている。しかも、アン・サリバンが善い悪いという道徳的判断をヘレン・ケラーに認識させた上で、人形を破壊するか保存するかの判断をヘレン・ケラーに委ねている。このように、ヘレン・ケラーが道徳的判断の基準を認識するまでのアン・サリバンのケアの仕方には、ヘレン・ケラーに対する強制的な側面がみられたが、後述するように、言葉の世界が開かれ、物事の道理を判断できるようになってからは、ヘレン・ケラーの姿勢を見守る気遣いの仕方が感じられる。この見守る気遣いの姿勢には、「物をその物であることにおいてそっとしておく（auf sich beruhen lassen）」といった、ハイデガーの『芸術作品の根源』にみる物への考察を参照することもできるであろう［Heidegger 1986:24］[16]。存在するものをただそれがそれであるような存在するものであるようにすること、人形の存在を人形が人形である状態、すなわち、ただタンスの上に置かれている状態にしておくことをヘレン・ケラーはアン・サリバンから教わったのである。

そこで、さらに、共に気遣うという、人と人との気遣いについて、ハイデガーのケア論に定位し論じてみたい。ハイデガーは、人間である現存在を、常に世界内存在において、事物を配慮すること、および共に存在する者に気遣いを向けること（Sorgen）として、そして、出会ってくる人々との「共存在（Mitsein）」として存在しているとする[17]。このことは、まさしく、現存在は、他者のない孤立的自我として存在しているのではないということを意味

している［Heidegger 2000:116］。このハイデガーの考え方に沿うならば、言葉の世界に開かれていなかったときでも、ヘレン・ケラーは、決して孤立的自我として存在していたのではないということが言える。もしも、ヘレン・ケラーが完全に孤立した自我として存立していたならば、アン・サリバンとの出会いは閉ざされたままになっていたであろう。

アン・サリバンがヘレン・ケラーを気遣うということ、このことは、一方的な気遣いのように思われるが、たとえ、ヘレン・ケラーがサリバン先生に、はむかったとしても、そのこと自体、「共に気遣うこと（Mitsorge）」によって存在している［Heidegger 1976:223］ということの証なのである。さらに、ハイデガーは、この「共に気遣うこと」を、「顧慮（Fürsorge）」と言い換えて、他者への気遣いの特異性として提示している［Heidegger 1976:223］。というのも、ハイデガーは、自己と他者との相互行為が、いつも、互いに助け合うものばかりではなく、互いに反目し合うということも、また、「顧慮」のあり方として示しているからである［Heidegger 2000:121］。その意味では、アン・サリバンとヘレン・ケラーが出会って数週間は、反目し合う状態にあったが、他者を気遣うことの一つの様態として解釈することができる。

しかも、ハイデガーは「社会施設（faktische soziale Einrichtung）」における気遣いを「顧慮（Fürsorge）」の典型例として挙げている［Heidegger 2000:121］。そもそも、Fürsorgeというドイツ語には、「心遣い」、「世話」などを意味すると同時に、「福祉保護」、「社会福祉」という意味がある[18]。この後者の意味は、教育や福祉におけるケアのあり方が、すでに、他者との共同存在なしにはありえないことを示唆している。衣食についての「配慮的な気遣い」も、「病気の体への看護」も、顧慮的な気遣いなのである［Heidegger 2000:121］。

アン・サリバンがヘレン・ケラーと関わり、指文字を通して、生活規範などを教え込もうとし、それに対してヘレン・ケラーが反目したり、受け入れたりする、その行為そのものが、Fürsorgeなのである。他者を気遣うということは、互いに反目し合うことを含めて、共存在としての「現存在の存在機構（die Seinsverfassung des Daseins）」のうちにあり、私たちがこの世界の内に存在し生きているその根拠となるものである［Heidegger 2000:121］。この人間の存在構造としての共なる存在における規範、それが道徳であり、ヘレン・ケラーが身につけるべき、善悪の基準・判断となる。そのケアのあり方をハイデガーは次のように分析している。ハイデガーは、「代行的－支配的顧慮（einspringend-beherrschenden Fürsorge）」すなわち、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」と、「垂範的－解放的顧慮（vorspringend-befreienden Fürsorge）」すなわち、「垂範することで他者を自由にする気遣い」とに分ける［Heidegger 2000:122］[19]。

本論では、以下、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」「垂範することで他者を自由にする気遣い」という二つの「顧慮」の様態から、「他者への気遣い」であるアン・サリバンのヘレン・ケラーへのケア、そのケアに対するヘレン・ケラーの応答を解釈し

てみたい。まず、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」というのは、被援助者に対し、その被援助者が願っていること、希望していることをあまり考慮に入れないケアのあり方である。このようなケアのあり方においても、援助者が被援助者の抱えている「気がかり」を取り去ったり、解消したりすることはできる。この場合、「気がかり」というのは、被援助者が意識しているしていないにかかわらず、自らが抱えている不安や心配といったものである。

ヘレン・ケラーがもっていた悩み、苦しみ、その心の痛みを何とか取り去ろうとしたアン・サリバンのケアのあり方は、そのヘレン・ケラーの心労の中へと飛び込んでいく行為である。例えば、アン・サリバンは、食事の作法（ナプキンを使う）というひとつのマナーを教えようとする［Sullivan 2003:147-148=1973:29-31］。食事のときはナプキンを使うというマナーとして、そのことを教え込むというケアのあり方は、本来、ヘレン・ケラーがナプキンを付けずに自由に食べたいという、自らの気がかり（気遣い）を考慮せず、アン・サリバンが、ナプキンを彼女に付けてしまう可能性を秘めている。

このことは、ヘレン・ケラーがすでに言語の世界がわずかながら開かれていたものの、生来、彼女の持っていた身振り、合図といった、彼女固有のものが望んでいること、欲していることを見落としてしまう可能性をはらんでいる。ハイデガーに従うならば、このようなケアのあり方は、結果的に、ヘレン・ケラーを従属的な関係へと与する傾向を持っている。「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」は、他者から「気遣い」をいわば奪取して、その他者に代わって配慮的な気遣いのうちに身をおき、その他者のために尽力することがある。

この気遣いは、配慮的に気遣われるべきことを他者に代わって引き受けるのである［Heidegger 2000:122］。その他者はその際、自己の地位から追い出され、身を退くことによって、配慮的に気遣われたものを、意のままになるように仕上げられたものとして後で受け取ることになるか、ないしは配慮的に気遣われたものからまったくまぬがれてしまうのである。そうした顧慮的な気遣いにおいては、他者は、依存して支配をうける人になることがあるのだが、たとえ、この支配が暗黙のうちのものであって、支配をうける人には秘匿されたままであろうとも、そうなのである。尽力して「気遣い」を奪うこうした顧慮的な気遣いは、相互共存在を広範囲にわたって規定しており、またそうした顧慮的な気遣いは、たいてい道具的存在者の配慮的な気遣いに関係している［Heidegger 2000:122］。

6. おわりに

このような「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」、すなわち、ケアするアン・サリバンの心を尽くした行為は、一方で、ケアされるヘレン・ケラーの従属を招いてしまうケアである。ケアするアン・サリバンの完全な善意、その献身性の強さが、限度を越えて、支配的なケアとして作動するならば、ケアされる者を服従させることが目的化してしまう可能性はある。

それに対して、「垂範することで他者を自由にする気遣い」というのは、他者をして、ヘレンケラー自身に彼女の可能性を選ばせるようにするケアのあり方であり、支配的なものではなく、「解放的（freigebend）」な顧慮である［Heidegger 1976:223］。このような「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、物などと関わりつつある「気遣い」としてのヘレン・ケラー自身の存在に関わる、アン・サリバンのケアの在り方なのである。言葉の世界が開かれてからのヘレン・ケラーに対するケアのあり方は、それまで、何とか物と言語との一致に気づかせたいという思いが先行していたアン・サリバンの「他者への気遣いを代行することで他者を支配する気遣い」のあり方とは違い、ヘレン・ケラー自身の「気がかり」を見守る態度を見取る気遣いなのである。

> 焼けつくような天気が続きます。ほんとうに雨が待ち遠しい。私たちはみんなヘレンのことが心配です。彼女はとても神経質で興奮しやすいのです。夜になっても眠れないし、食欲もありません。彼女に何をしてやったらよいのか見当がつきません。お医者さんは、彼女の心が活発すぎるのだとおっしゃいますが、ヘレンに考えるのをやめさせるなんてどうしてできましょう。朝起きるとすぐ字を綴りはじめ、それを一日中続けるのです。［Sullivan 2003:157=1973:49］

この「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、本質的に、他者の気がかり、つまり他者の実存に関わっている気遣い（気がかり）のことであり、他者が配慮する何かに関わるものではない［Heidegger 2000:122］。「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、他者に対して外から何かを押し付けようとするケアのあり方ではない。そうではなく、このケアの特徴は、「自分の気がかりの中で、自らに見通しのきくものになるように手助けをする（verhelfen）」ことであり、「気がかりに対して自由になるように手助けをする」というところにある［Heidegger 2000:122］。この場合、アン・サリバンは、なるべくヘレン・ケラーが疲れないように見守り、ヘレン・ケラーが自由に考えることをやめさせるのではなく、む

しろ、手助けしようとしている。「垂範することで他者を自由にする気遣い」というのは、「注意深く他者に範を垂れること」である［Heidegger 1976:223］。アン・サリバンは、責任を自覚して指導しながら、自己の根源から成長する生命のもつ権利を決して忘れず、寛容の念をもって、ヘレン・ケラーの成長にまかせて放任しながら、教育的行為の意義の根源である義務を忘れることはなかったのである［Litt 1976;81-82］。すなわち、アン・サリバンは、ヘレン・ケラーへの根源的な責任を負うという態度、すなわち、そのつどの状況を本来的に引き受けるという「決意性（Entschlossenheit）」によって、「垂範することで他者を自由にする気遣い」を遂行することができるのである。

このようなケアのあり方が必要になるのは、他者がさしあたってたいていは、自分の存在を見通してはおらず、自己の存在に対して自由になっていないからである。つまりは、他者は「ひと」という様態において自己の存在の忘却に陥っているのである[20)]。「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、他者が、自らの力で「ひと」の様態を脱し、自らの存在に対する気遣い（気がかり）に自らの力で切り開き、自らの存在に向けて自らが自由になることを手助けする。その意味で、この「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、手助けするケアのあり方であって、強制するケアのあり方ではない。「垂範することで他者を自由にする気遣い」というケアの様態は、他者が、その人自身に返ることができ、その人固有（eigen）のものになるための、すなわち、その人自身の内面から自己に最も固有で本来的なものになるためのあり方なのである。それゆえに、この「垂範することで他者を自由にする気遣い」は、本来性（Eigentlichkeit）の様態なのである［Heidegger 1976:223］[21)]。

上記の手紙からも推察できるように、このアン・サリバンのケアのあり方は、諏訪（教育実践家）が解するような、ヘレン・ケラーに対する強制を伴った一方的なケアのあり方ではない。諏訪は、テーブルマナーの例を挙げ、「サリヴァン先生は教育関係の初発が権威者による一方的な文化の押しつけであることを承知していて、文字どおり暴力でお菓子を食べる文化作法を押しつける」と論じる。

しかしながら、アン・サリバンのヘレン・ケラーへのテーブルマナーの指導は、文化遺産の継承としての「文化作法」を単にヘレン・ケラーに身に付けさせようとしたものだけではない。「ヘレンの食事の作法はすさまじいものです。他人の皿に手を突っ込み、勝手に取って食べ、料理の皿がまわってくると、手づかみで何でもほしい物をとります」［Sullivan 2003:141=1973:18］。このことから解釈できることは、アン・サリバン自身は、文化作法を通して、ヘレン・ケラーに、最低限、物や他者に配慮することを学ばせたかったということである。

だが、諏訪の言うアン・サリバンのヘレン・ケラーに対する見解は、近代的な教育観を前提とする、文化遺産の継承を担うためのものとしてのみ解されている。アン・サリバンのケアが一面で「代行的－支配的」なものであったとしても、彼女のヘレン・ケラーへの教育・

援助が、単に強制的なものであるという見方にも疑問を抱かせるであろう[22)]。諏訪の「サリヴァン先生がヘレンに文化作法を無理矢理押しつけて、ヘレンの固有の生き方（作法）を放棄させたような状態に、学ぶ者は立っていなければ学べない」といった主張は、作法にともなう、自らが物や他者に配慮する生き方、共同存在の中での個としてのヘレン・ケラーの生き方を否定する見解ではないだろうか。他者の食事に自由気ままに手を出すヘレン・ケラーの行為を、見て見ぬ振りをすること自体、彼女が彼女自身で物に対して配慮するという本来的なケアのあり方を否定することになる。アン・サリバンのヘレン・ケラーへの教育として、そのケアのあり方は、文化遺産の継承といった大それたものではなく、物には個々の名前があるといったことの驚き、その喜びをヘレン・ケラーに感じさせたいがためである。

これまで、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」と「垂範することで他者を自由にする気遣い」というケアのあり方についてみてきた。このことからもわかるように、アン・サリバンとヘレン・ケラーの「ケアする－される関係」を、二項対立的に捉え、「支配する－服従する関係」とする諏訪の主張には、個と個、実存と実存との関係性が欠如したものと捉えることができるであろう。これまで述べてきたアン・サリバンのヘレン・ケラーに対するケアのあり方は、ヘレン・ケラーが言葉と物とのつながりに気づいていなかった時期の、ヘレン・ケラーに対して自由を与えない強制力をともなった「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」とともに、物と言葉との関わりに気づかされてからの、ヘレン・ケラーの言動を見守りながら解放感を与える、そういった気遣いのあり方を垣間見ることができる。このことは、ケアの両義的な側面にアン・サリバン自身が気づかされることによって、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」という非本来的な気遣いに陥りがちな援助者の態度を、他者へのそのつどの具体的な状況に応じた「垂範することで他者を自由にする気遣い」という本来的な気遣いへと与え返していったということである。

大切なことは、援助者は、他者を解放するケアのあり方が達成できたと思ったときから、すでに他者への強制をともなう態度、ケアのあり方へと変容する可能性があるということを意識するということである。そして、ケアする者は、このような両義的なケアのあり方が拮抗していることを認識し、「他者への気遣いを代行することで支配する気遣い」といった非本来的なケアのあり方に陥りがちな援助者自らの行為を自覚しつつも、被援助者にとって、その人固有の存在であることを承認できる、可能性としての「垂範することで他者を自由にする気遣い」へと引き戻そうと努力する必要がある。援助者の援助に内属されているこれら両義的な面についての認識を深めることによって、援助者は被援助者が求めているケアを実践できるであろう。

注

1）自身が盲ろう者である福島智は、『盲ろう者とノーマライゼーション』などで、サリバンがヘレンの「読み」への関心を引き出した指導・教育を評価している。

2）例えば、諏訪哲二は、アン・サリバンの一連の教育的行為が「教育の奥に隠されている暴力（強制・支配）の姿」［諏訪 2009：17］であると論じている。

3）この鍵カッコにおける2つのケアのあり方は、後述するように、ハイデガーのケア概念である「垂範的－解放的顧慮」と「代行的－支配的顧慮」を念頭において提示したものである。

4）アン・サリバンについての生い立ちは、『ヘレン・ケラーをめぐる人々（1）アン・サリバンの少女時代』［飯塚英一、佐藤幸一 2009:14］による。

5）しかも、アン・サリバンがヘレン・ケラー家をはじめて訪れた翌朝、彼女は、ヘレン・ケラーを自分の部屋に連れて行き、ローラ・ブリッジマンがこしらえた着物を着た「D-O-L-L（人形）」をプレゼントし、人形の綴りをヘレン・ケラーの手のひらに書いている［Helen Keller 1902:15=1995:31-32］ことからも、ローラ・ブリッジマンが指文字によって、物を理解することができたというアン・サリバンの信念をうかがい知ることができる。

6）メアリー・E・リッチモンドは、サミエル・グリッドレィ・ハウ博士によるローラ・ブリッジマンについての覚書を含めた『ローラ・ブリッジマンの生涯』から、「単なる隣人」と「専門家」との間における方法論や見解の相違の分析を行っている［Richmond 2010:2=2007:16-17］。このことは、ケアの実践論にとって、非常に有意義な示唆を与えていると考え、論者は、本文においてさらにこのことについて論考している。

7）進化論で有名なチャールズ・ダーウィンも、幾度となく、このローラ・ブリッジマンという少女に言及している。ただし、ダーウィンの場合は、ローラ・ブリッジマンの表情や身振りが「生得的」であり、より原始に近い形で表出されるということを検証することが目的であった。［三島亜紀子 2007:78-79］。当然このことは、ダーウィンの誤った見識である。

8）エドムント・フッサールは、1935年、よく知られた講演『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』において、生活世界が、人間の日常的な実践の状況として、科学的認識をも包括するあらゆる実践の地盤であることを述べ、生活世界への還帰を主張した。ローラ・ブリッジマンの幼年期は19世紀半ばではあるが、ハウ博士が体系化しようとしていた教育に対する科学的知見が存在していた。論者は、そういった科学的・組織的な知のあり方に対する生活世界という観点に着目するならば、後世のフッサールの「生活世界」についての論考から考察することは可能であると考える。フッサールは、「具体的生活世界は、〈科学的に真である〉世界に対しては、それを基礎づける地盤であるが、同時に、生活世

界独自の普遍的具体性として科学をも包括することである」［Husserl　1954:134］としている。

9）児島亜紀子は、援助とは、自分で状況を判断し、行為することのできるひとたる援助者の視点を通して、被援助者の世界を見ることから開始するのではないかという「ケアする者－される者」の関係性を「主体性－他者性」の論点から指摘している［児島2007: 36］。

10）福島智は、村井［1987:175］を引用し、アン・サリバンが訪れる前にヘレン・ケラーが自分独自の身振りを身につけていたことを挙げ、指文字との対応関係で重要であったことを指摘している［福島 2003:162-170］。

11）アン・サリバンがパーキンズ盲学校に入学したときに校長の職にあり、ハウ博士の後継者でもあった（Lash　1980 : 21）。

12）ハイデガーは、1927年に刊行した『存在と時間』に先駆けて、1925年と1926年の冬学期、マールブルクにおいて講義を行っていた。それが、『論理学』として、全集の21巻に納められている。この講義では、『存在と時間』で用いられている彼の独創的な用語がすでに使われている。『論理学』第17節では、すでに、ドイツ語のSorgeという単語を巧みに使って、現存在の存在としての「気遣い（Sorge）」、特に、物への気遣いである「配慮（Besorgen）」について詳細に述べられている。そのことから、本論稿では、気遣いについての構造分析において、『存在と時間』だけでなく、『論理学』をも援用し、ケアの在り方を論じることを試みている。

13）ボルノーは、『認識の哲学』において、ハイデガーの道具連関に注目し、道具との交わりにおける人間の在り方を問題にしている。ボルノーは、人間の世界理解における手許のものという日常的慣習的な道具への理解からどのようにして理論的認識態度が出てくるのかを論じている。しかしながら、ヘレン・ケラーが言葉の世界に開かれていない状態にあったとき、道具連関における物のあり方としてではなく、「手前のもの」という在り方で物が存在していたのであるが、このことは、単純に欠如態としての物のあり方としてみることはできないであろう。

14）ハイデガーは、物を気遣うということにおいて、ハンマーの適所性（Bewandnis）についての詳細な分析を試みている［Heidegger 2000:69ff,83ff］。ハンマーは、例えば、木と鉄の材質の組み合わせによって作られているが、その材質の塊は、適所性、すなわち、ハンマーは釘を打つためにということが成立しているからこそ、打つ道具として機能しうるのである。

15）一般的には、Vorhandenesは「眼前のもの」と訳される場合が多いが、ここでは、handといった、「手」に関わる言葉に立ち返り、「手」に触れることを通してヘレン・ケラーが物を認識していく過程を考慮し「手前のもの」としている。

16）道具連関からはずれた物への考察は、ハイデガーの『存在と時間』と、『芸術作品の根

源』では異なっている。『存在と時間』では、道具の欠如態として扱われていた「モノ」は、『芸術作品の根源』では、そのような「モノ」こそが、芸術作品を作品たらしめている存在となっている。論者はこのことの論考を課題としてあらためて問い直してみたい。

17）このハイデガーの言葉は、『ツォリコーン・ゼミナール』［Heidegger 1994:204］に収められていて、ハイデガーと深く親交していた精神科医メダルト・ボスとの対話によるものである。この箇所では、メダルト・ボスがハイデガーに対して「『存在と時間』のあちこちに、少し形を変えて何度も出てくる中心命題、現存在は、その存在においてその存在そのものが問題となっている存在者である、というのはどういうことか」と問うたことに答えているものの一部である。

18）例えば、『独和大辞典 コンパクト版』［1990］803頁 編者代表 国松孝二　小学館。
もちろん、ハイデガーのいう「他者への気遣い」というのは、元来、存在の意味に至る手がかりとして位置づけられるが、「社会施設」における気遣いとか、「病気の体への看護」という気遣いという具体的なかたちでの言及が多く散見することができる。このことは、存在への通路としての現存在を人間学的な視点から捉えなおす余地を私たちに与えている。

19）顧慮的気遣いの二つの様態を「尽力し支配する顧慮的な気遣い」と「手本を示し解放する顧慮的な気遣い」という訳語もある（ハイデガー著　原佑、渡邊二郎訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社 2003年）。

20）ハイデガーは「ひと（das Man）」という人間の在り方を解明する。「ひと」というあり方は、日常的な世界内存在の中では、他者との共同存在が現存在にはあるということである。また、さしあたっては、人間は、自己とも他者ともつかない中性的な在り方によって支配され、頽落したかたちで、人間相互の触れ合いは失われているといった在り方である［Heidegger 2000:113-130］。では、この「ひと」という人間の在り方に、私たちはとどまっていてよいのかという問題がでてくる。人間は、真に実存するために、「ひと」の状態から脱して、本来の自己を取り戻さなければならない。ハイデガー自身は、本来的な自己を目指すべきであると述べているわけではない。しかしながら、ハイデガーの存在論は、彼の意図を越えて、自己にとっての実存的な生き方の導きとなるものである。

21）ここで言う、本来性というのは、本来的な気遣い、ケアの在り方を性格づけたものであり、「垂範的－解放的顧慮」の在り方がそれにあたる。それに対して、非本来性というのは、「代行的－支配的顧慮」のそれにあたる。

22）ただし、ドゥウォーキン［Dworkin 1983:20］の主張のように、当人のための介入としてパターナリスティックな個人の自由への介入を正当化する主張や、ファインバーグが挙げているような「当人の性質の改良・向上・完成を目指した介入」の名のもとに、その当人の行動の自由を規制し、公教育の名のもとに必要なものとして正当化するものであって

はならない。あくまでも論者は、ファインバーグの唱えたパターナリズムを含む自由の制限原理［Feinberg 1986:16-18］、そこで論じられている卓越・完成主義（perfectionism）による当人への「介入」は、基本的には肯定すべきではないと考える。

引用・参考文献　［　］は初出年を示す

児島亜紀子（2007）「主体性と他者性 － 他者に向けて開かれた援助のありようを探って」『社会問題研究』第57巻 第1号

飯塚英一、佐藤幸一（2009）『ヘレン・ケラーをめぐる人々（1）アン・サリヴァンの少女時代』帝京大学宇都宮キャンパス研究年報、人文編

諏訪哲二（2009）『間違いだらけの教育論』光文社新書

高田珠樹（1996）『ハイデガー　存在の歴史』講談社

中村剛（2008）『人生福祉学に学ぶ －かけがえのなさの再発見』あいり出版

福島智（2003）『盲ろう者とノーマライゼーション』明石書店

三島亜紀子（2007）『社会福祉学の〈科学〉性―ソーシャルワーカーは専門職か？』勁草書房

村井潤一（1987）『言語と言語障害を考える』ミネルヴァ書房

ハイデガー（2003）　原佑、渡邊二郎訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社

矢野智司（1996）『ソクラテスのダブル・バインド －意味生成の教育人間学』世織書房

吉田章宏（1987）『学ぶと教える －授業の現象学への道』海鳴社

Bollnow, Friedrich Otto（1970）*Philosophie der Erkenntnis*, W.Kohlhammer.

Feinberg, Joel（1986）*Harm to Self*, Oxford Univ.Press.

Dworkin, Gerald（1983）［1971］ *Paternalism*, University of Minnesota press.

Heidegger, Martin（2000）［1927］ *Sein und Zeit*, Max Niemeyer.（SZ）

Heidegger, Martin（1994）*Zollikoner Seminare*, hrsg.von Medard Boss, Vittorio Klostermann.

Heidegger, Martin（1976）*Logik. Die Frage nach der Wahrheit,* Gesamtausgabe Band21, Vittorio Klostermann.

Heidegger, Martin（1986）［1960］*Der Ursprung des Kunstwerkes*, Vittorio Klostermann. Reclam Stuttgart.

Husserl, Edmund（1962）［1954］Husserliana Bd.,*Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie*. hrsg.v. W.Biemel,den Haag.

Keller, Helen（2010）［1902］ *The Story of My Life*, Signet Classics.（=1995 川西進訳『ヘレン・ケラー自伝』ぶどう社）

Keller, Helen（2009）［1903］ *The World I Live In and Optimism*, Dover Publications,Inc.

Lash, Joseph P（1980）*Helen and Teacher, The Story of Helen Keller and Anne Sullivan*

Macy, Allen Lane.

Litt, Theodor（1976）［1965］ *Führen oder Wachsenlassen*, Ernst Klett Verlag.

Richmond, Mary Ellen（2010）［1922］ *What is Social Case Work?*, General Books.（=2007 杉本一義訳『人間の発見と形成 －人生福祉学の萌芽』出版館ブック・クラブ）

Sullivan, Annie（2003）"*Annie Sullivan's Letters and Reports*", The Story of My Life, W.W.Norton&Co.,Inc.（=1973槇恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか －サリバン先生の記録』明治図書出版